霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第101号
平成24年2月20日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

霊宝館の高野槙に止まるシメ（雌）

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

冬期平常展開催中

第6回もみじ祭フォトコンテスト
全応募作品展示中
いずれも平成24年4月22日(日)まで

被災地の一日も早い復興を！

第101号　目次

冬期平常展のご案内・
快慶の銘文を発見！……2
収蔵品の紹介75……3
第六回もみじ祭フォトコンテスト
入選作品発表……4～7
赤不動明王と会津八一（後編）……8
高野山の古建築 第五回……9
後山の女人禁制（第二回）……10～11
エッセイ 冬の高野山（最終回）……12
第六回もみじ祭を開催しました……13
新収蔵品の紹介……14～15
霊宝館の庭園……16

冬期平常展開催中

平成二十三年六月に岩手県の平泉が世界遺産に登録されました。霊宝館には中尊寺伝来の国宝・金銀字一切経が四二九六巻保存されています。以前は附属の漆塗箱に収めていましたが、霊宝館だより第九十七号でもご報告しましたように、引き出し式の収納棚を新たに設け、整理し直しました（写真）。今回は新旧保管状態を再現し、その膨大な量の一部をうかがえるような展示となっています。

また、昨年秋、執金剛神像（しゅこんごうしんぞう）の胎内から発見された快慶の銘文や納入品（左記参照）の写真パネルを展示し、わかりやすく解説しています。

〈主な展示品〉

国宝　金銀字一切経（及び箱）　金剛峯寺
重文　南保又二郎納骨遺品
　　宝篋印塔・鋳出銅板三尊仏像　金剛峯寺
重文　四天王独鈷鈴　金剛峯寺
重文　金銅五鈷杵　金剛峯寺
重文　金銅五鈷鈴　金剛峯寺
県指定　赤銅菊花牡丹文透彫箱　金剛峯寺
未指定　星供曼荼羅図　大明王院
未指定　寒牡丹図（木村武山筆）　金剛峯寺

快慶の銘文を発見！

平成二十三年九月二十一日、金剛峯寺が所蔵する執金剛神像の胎内から、鎌倉時代の名仏師快慶の銘文が発見されました。新聞でも報道されましたので、ご存知の方も多いでしょう。

胎内の首ホゾ部分に

𑖀（アン）阿弥陀仏

とありました。𑖀阿弥陀仏とは、快慶が建久三年頃（一一九二）から建仁三年（一二〇三）まで名乗っていた法号です。つまり執金剛神像はこの期間に造られたことが分かります。今回の発見により、元々一具（セット）の深沙大将像（じんじゃだいしょうぞう）も快慶によって造られたことが判明します。加えて、重要文化財の快慶作四天王像とも一具であったことも確実となりました。

以前より、執金剛神像と深沙大将像は快慶作ではないかと言われていましたが、結論は出ていませんでした。しかし、今回の発見で議論は決着することになります。

銘文の他に納入文書（一部は陀羅尼）が二つ発見されています。一つは取り出されましたが、もう一つは胎内に残されたままです。今後、この文書が取り出されたら、また大きな発見があるかも知れません。

快慶の銘文

胎内に残る納入文書

取り出された納入品（陀羅尼）

寄付のお礼

東京都の水野道長様ほか二名様から文化財保護のためのご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

収蔵品の紹介 75

釈迦誕生図

鎌倉時代　絹本著色

縦 116.0 cm　横 83.3 cm

金剛峯寺

釈迦誕生図

仏教を開いた釈尊（お釈迦さま）は二千数百年前の四月八日、インド東部のルンビニーで誕生したといわれます。摩耶夫人の右脇の下から生まれ、すぐに七歩歩いて上下を指さし「天上天下唯我独尊」と宣言しました（これを「獅子吼」といいます）。本図はその誕生の場面を描いたもので、他に類例のない珍しい構図です。仁和寺門跡、御室派管長、高野山無量寿院（現在の宝寿院）門主を歴任した浦上隆応（一八五六～一九二六）旧蔵品でしたが、昭和二年（一九二七）に寄付されました。

釈尊が歩いた跡には蓮華が生じ、頭上からは二匹の龍の口から清めの水が注がれています。花祭りの時に誕生仏（子供の姿の釈尊）の像に甘茶を注ぐのは、この清めの水に由来します。その下には各国の王やそれぞれ五百頭がやってきたという獅子・象、また木のそばには道具を置いて合掌する漁師や狩人が描かれています。これらは仏伝をもとに描かれており、画面左上の建物で横たわり様子をうかがう魔王を除けば、天上の神々や地上の生きとし生けるものが釈尊の誕生を祝っています。

なお、金剛峯寺では毎年四月八日に本図を本尊として仏生会（花祭り）が行われます。霊宝館に収蔵、展示されている絵画の中には本図のように、現在も実際に法会で祀られるものが他にもあります。毎年の行事が近づくと一時返却の手続きがとられ、霊宝館に長く勤務していると、このやりとりで季節を感じます。単なる美術品ではなく、過去の遺物でもなく、信仰の対象であることを再認識させられ、また高野山に現在まで連綿と続く信仰の歴史を感じさせてくれます。

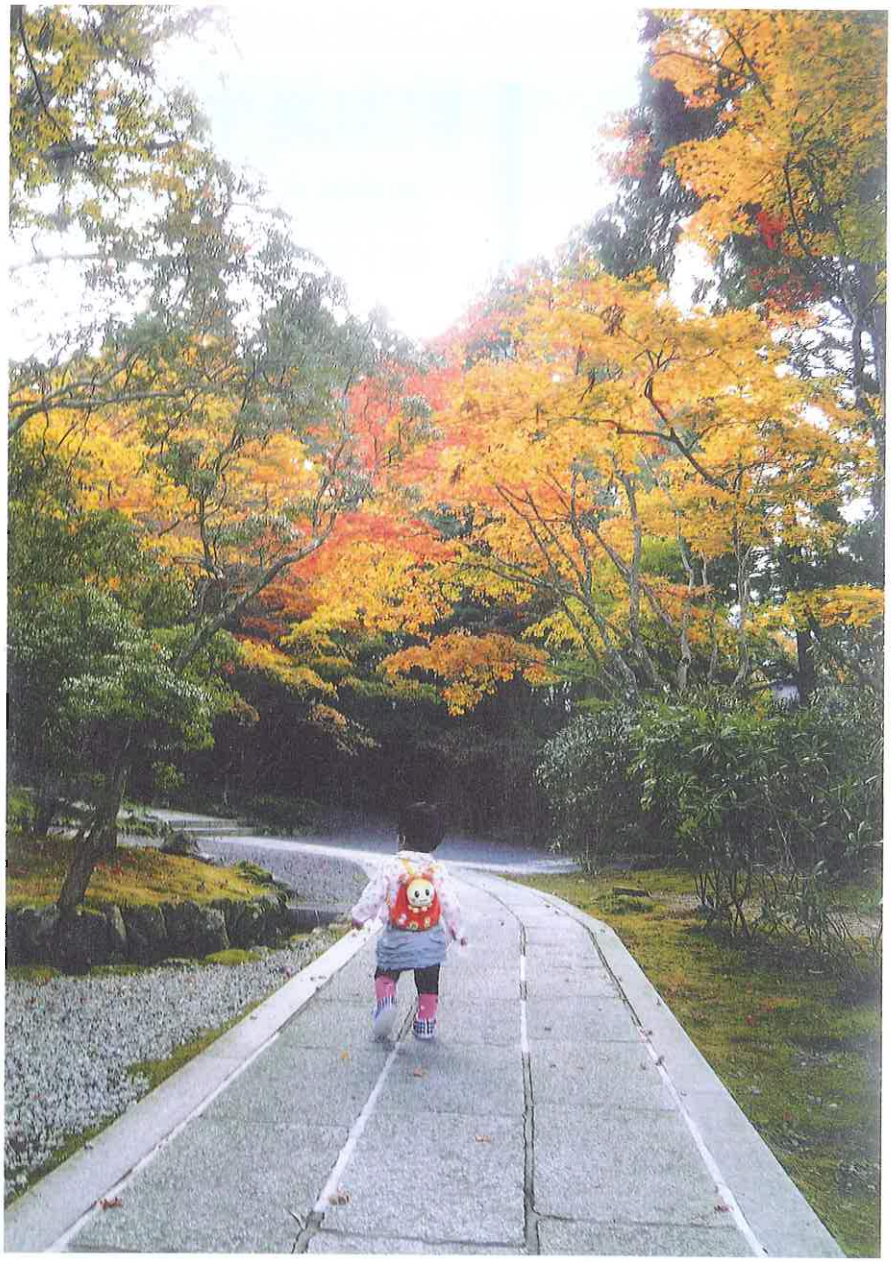
（F）

お詫び

収蔵品の紹介74（霊宝館だより第一〇〇号）掲載の「八宗論大日如来像」（善集院）の図版が左右反転しておりました。善集院様ならびに読者の皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

第六回もみじ祭 フォトコンテスト入選作品発表

（受賞者敬称略・順不同）



グランプリ賞　森口　和彦

撮影場所：霊宝館

題「10月　霊宝館にて」

1歳8ヵ月になる娘ですが、ひとりで歩くのが楽しくて仕方ない時期です。その歩く姿にはいつも癒されています。

平成二十三年十一月に募集しました、第六回もみじ祭フォトコンテスト「癒しの高野山」には三十六点の応募をいただきました。東日本大震災や紀伊半島の水害など、心痛む出来事が多かったため、「癒し」をテーマに募集しました。どの作品からも、優しさや元気付けられるようなパワーが感じられるものばかりでした。

その中から特に優秀作品として、十五点が選ばれましたので、結果発表と合わせてご紹介させていただきます。奇しくも小さな子供に焦点を当てた作品が上位となりました。やはり、子供の姿には誰もが癒されるのでしょう。写真とコメントから、応募者の皆様の祈りが届き、たくさんの人が癒され、また災害からの復興に向けて頑張っておられる方々が元気になられますように。そして子供達の未来が明るいものとなりますように。

応募者の全作品は四月二十二日（日）まで霊宝館で展示していますので、ぜひご覧ください。たくさんのご応募ありがとうございました。

※長文のコメントにつきましては、紙面の都合で一部省略させていただきました。何卒ご了承ください。

金　賞　高橋　順二

撮影場所：壇上伽藍

題「僧列」

一足早い秋の高野山、紅葉で有名な蛇腹道を正装された僧侶の方々が、法螺貝の音色を響かせ、「お練法会」の散華をしながら歩かれる様子を一段高い所から撮影しました。

熱心に雨の中で撮影されるアマチュアカメラマンに混じりピンク色のレインコートを着た子供の珍しそうな様子が微笑ましかったです。

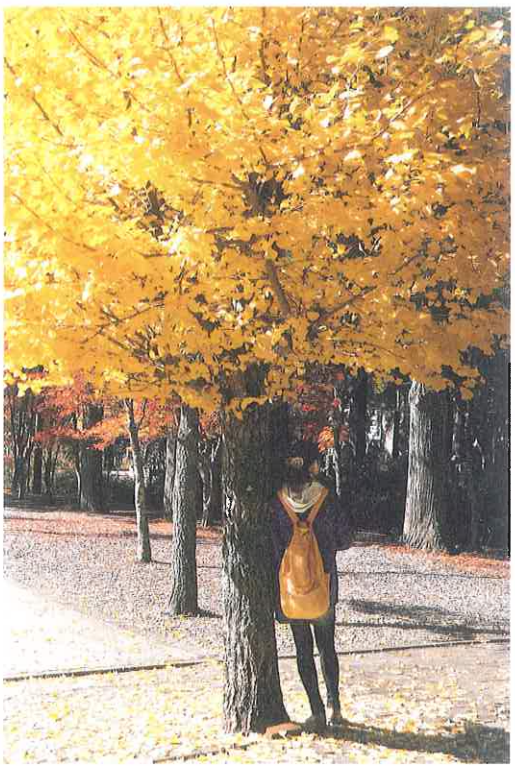
銀　賞　増谷　妙子

撮影場所：本王院境内

今年のテーマ「癒しの高野山」をさがしてみましたが、私にとってお地蔵さんが一番の癒しかと、決めました。

日本の中で突然の災害。私にはどうしようもなく、心痛めています。高野山に生まれ、現代にいたりお大師様の御加護をいただき感謝の気持ちで一杯です。お地蔵様はみる者の心に応じて様々な表情で語りかけ、慈愛に満ちた微笑みと救済、これからもお守りいただけると思います。

皆様が元気で過ごせます様お祈りいたします。



銀　賞　中道　ちあき

撮影場所：奥之院英霊殿付近

黄金色に輝く銀杏の木の下、女性がひとり佇んでいました。木に寄り添い、何を思っているのでしょう。

朝日が差し込み、そこだけゆっくりと時間が流れているようで、心惹かれて撮らせていただきました。

銅　賞　奥村　行仙

撮影場所：金剛峯寺前の川

紅葉を求めて散策しておりましたところ、思わぬものに出会いました。水の模様が一段と画面構成に役立ち、高野山の秋をまた見つけました。淀みで落ち葉が、役目を終えているのにこれだけの力を持つ。高野山に多くのご老人がお参りしている姿と重ね合わせ、老いてもなお輝く参拝の列をも思わせてくれる一枚となりました。どんな葉でも最後まで華やかであることを力強く感じさせてくれ、まだまだ頑張ろうという思いの一枚となりました。

入　賞　塩尻　博

撮影場所：奥之院（水向け地蔵の前）

私は、母と弟が奥之院へ納骨させていただいているため、ほぼ毎年お参りに行きます。

中之橋の駐車場から歩いて、奥之院の参道へ入ると雰囲気が一変し、心地よい緊張感に包まれます。何度も歩いているのに何時も同じです。そして水向け地蔵の前に出ると気持ちが少し和らぎます。水向け地蔵では、各お地蔵様に水をかけ、無心でお参りをします。この写真はその時のもの（家内）です。それから奥之院、御廟、納骨堂でお参りをして、奥之院の前の階段を下りる時は何か清清しい気持ちになります。これが癒しでしょうか。またお参りに行きます。

銅　賞　岩崎　幸夫

撮影場所：大塔前

題「和(なご)み」

10月16日の秋日和の気持ちの良い日でした。

大塔前広場にて、御住職が母子になごやかに話をされていたのどかな風情を一枚撮らせてもらいました。気持ちが和みました写真です。

銅　賞　木下　滋

撮影場所：壇上伽藍

木漏れ日の優しい光と、水面に落ちたもみじの葉っぱとが相まって、秋の風情を醸しだしていました。

霊宝館長賞　小滝　基永

撮影場所：金剛峯寺表門

今年の5月に撮影しました、金剛峯寺の表門と四国八十八箇所巡りのお遍路さん。四国を廻られ高野山へ納め参拝されるお遍路さんは、東日本大震災、台風12号及び15号による被害で沢山の命が奪われた日本全体の一日でも早い復興を願い参拝されていると思います。

入　賞　井戸　睦雄

撮影場所：大門

題「佛光」

この度写真を愛好する者にとって、霊宝館写真コンテストに参加出来ることを、幸せに思う者です。

今年日本は東日本大震災で、多くの尊い人命が犠牲となりました。亡くなられた方々のご冥福を祈ると共に、早期復興を願うばかりです。このような世相のなか、霊場高野山の入口大門を潜り、眩しく照らす「佛光」その光景に巡り会い、震災からの一日も早い復興と世界人類が、平和でありますようにと祈りつつシャッターの音を聞きました。合掌

入　賞　近藤　説秀

撮影場所：恵光院

恵光院の庭の羽衣紅葉です。雨上がりに葉の先端についた水滴のなかに見つけた紅葉を撮ったものです。

入　賞　堀内　勇

撮影場所：伽藍蛇腹道

高野山には毎年、季節ごと（積雪・桜・石楠花・紅葉など）に訪れていますが、最も華やいだ季節は紅葉の彩りの頃だと思います。各所で楓が真っ赤に染まり、銀杏も負けじと黄色く輝く様はまるで色が踊っているように見えます。そのなかで特にお気に入りが、この蛇腹道です。まだ人通りが少ない早朝、眩しい秋の日差しが差し込むと最高潮を迎えます。

入　賞　丹下　三郎

撮影場所：奥之院英霊殿平和橋

今年は世界的にみても天変地異のはげしい年でした。紅葉の色づきも今一つという感じでした。小雨の降る昼下がり、一組の仲良しの夫婦連れに出会いました。お互いに携帯電話のカメラで紅葉を撮影していたのが印象的でした。秋の高野山はやさしく人の心を癒してくれる場所です。

入　賞　富澤　京子

撮影場所：伽藍蓮池

ほんとうに多くの方たちが、痛み苦しんだ年でした。

毎年高野山に出かけ、お参りさせていただくと、とても心が安らかになり癒されます。紅葉の季節、金堂の蓮池の周りでは噴水と紅葉の癒しのステージが静かに開催されていました。そぉっとカメラを向けて撮影しました。日本全体の曇りが洗い流され、軽やかな晴れ気分になりますように !!

入　賞　麻野　卓三

撮影場所：大塔前

題「大師と大塔と鳳凰」

2011年11月、秋晴れの日の中。大塔の空に、まるで羽ばたいた鳳凰に乗ったお大師さまが、御廟から大門、そして全国へ救済の旅に駆けめぐるかのように、雲が風にのって過ぎていきました。美しく晴れ晴れとした気分に誘われた一瞬でした。

赤不動明王と会津八一（後編）

高野山高等学校教諭　山本　七重

余話―歌会始と石碑―

会津八一の短歌と赤不動明王について述べてきたがそれに関連して、余話を二つ記しておきたい。

宮中では現在でも新年に天皇、皇后両陛下ご臨席のもと「歌会始」といわれる伝統ある行事が行われている。この歌会始に出席することは歌人としての最高の名誉だといわれているが、会津八一もすぐれた歌人であったので、召人（特に召されて短歌を詠進する人のこと）として、昭和二十八年に出席したことがある。

この時に八一が詠んだ歌は、

ふなびとははやこぎいでよふきあれしよひのなごりのなほたかくとも

というものであった。この時の御題は「船出」というものであり、その題に添った気概あふれる八一らしい歌である。

当時はまだ、終戦から十年も経っていない時期であり、日本の国民をふな人に喩えて、嵐（戦争）の影響がまだ残っているが大海に思い切ってこぎ出せと、奮起を促した歌である。

現在この歌は、八一の母校である新潟高校に歌碑が建てられているが、これから社会（大海）に出て行こうという高校生達にとって誠に相応しい歌であると思う。

なお、この歌会始には一般の人々も応募でき、入選すれば皇居で行われる歌会始に招待されることになっている。しかし毎年、国内はもとより外国からも応募が何万首とあり、入選できるのはその中の十首ほどであり、入選するには並はずれた実力が必要である。

さて、この歌会始には高野山からも過去に二人出席された方がおられるが、そのうちのお一人が赤不動明王をお祀りする明王院の前住職である高岡隆州師である。

それは昭和四十五年のことで、御題は「花」となっており、その時の高岡師の歌は、

高らかに仏のみ名を唱へつつ職衆の僧の花散らしゆく

というものであった。素直でおおらかな歌であり、そのお人柄が偲ばれるやさしく美しい歌である。ちなみに、手元にある毎日新聞社発行の『宮中歌会始』を開いてみると、各年の入選歌が生年月日順に記されており、この年に入選した歌人のなかでは最後に書かれていることから最年少入選であったことが知られる。

なお、明王院には赤不動明王以外にもぜひ見ていただきたいものの一つに入口山門前の石碑がある。この石碑は霊宝館館長も務め高野山の文化財保存に大きな功績を残された堀田真快大僧正（元金剛峯寺座主）の筆になるものであり、石碑の正面には「國寶赤不動明王」、向かって右側には「別格本山明王院」と達筆な文字で刻まれている。書をよくされたことで知られる大僧正の作品の中でも特に平明な美しさの中に力強さを感じる、あじわい深い優れた作品である。

この石碑は、昭和四十七年に建てられたもので、端然として門前にたたずみながら悠々と時を刻み、明王院を訪れる人々に無言のうちに、美がもつすばらしさや永遠性についてやさしく語りかけている。赤不動明王とともにぜひこの石碑も鑑賞していただきたいと思う。

合掌

連載

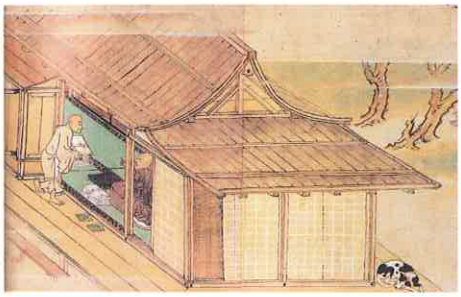
高野山の古建築

第五回　国宝 金剛峯寺不動堂（四）

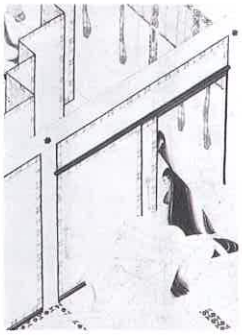
（公財）和歌山県文化財センター　鳴海 祥博

正面の全景　軒と屋根の納まりを見ると、向かって右側に庇を差し掛けて出来上がった姿であることが推察できる。

不動堂内部の襖　襖は柱間に３枚建てとなっている。敷居と鴨居は漆塗り。鴨居の上には「小障子」が建て込まれている。「鳥居障子」という形式の構えである。襖と小障子には絹の縁まわしを付け、襖の引き手は紐である。



「慕帰絵詞」に描かれた本願寺三世覚如の住まい。屋根の差し掛けが不動堂と同じ形式である。



「枕草子絵詞」（13 世紀末の作品）に描かれた襖。不動堂と全く同じ構えである。

京都御所清涼殿の襖。安政２年（1855）に再建されたもの。

金剛峯寺不動堂は、古い時代の住宅を思わせるような建物だと評されています。そこで今回はどこが住宅風なのかを探ってみたいと思います。

まず外観を見ると、全体的に立ちが低くて軽やかな感じが、一般的な仏堂と違う印象を与えます。

また、普通のお堂の場合だと軒の両端は「隅木」という材を用いて納めるのですが、不動堂の正面側は隅木を用いずに「縋破風」という材で納めています。中世の絵巻物を見ると、僧侶の住房とか一般の住宅がこのような形式で描かれています。これは切妻屋根の建物に、庇を取り付けた構造で、古くは住宅の一般的な造り方だったのです。

不動堂の正面両脇の一間は、建具のない吹き放ちの空間となっています。ここがどのように使われたのかはよく分からないのですが、これも絵巻物に描かれた住宅に似たような構えを見ることができます。

住宅風という由縁はこの辺にありそうです。

もう一つ最も住宅風な「しつらい」が内部にあります。それは「襖」です。正しくは「襖障子」といいます。襖はまさに住宅専用の建具です。不動堂の襖は、襖紙こそ張り替えられて近年のものとなっていますが、襖の骨や構えは古いままで、恐らく現存最古のとても貴重なものなのです。

そして現代の襖とは少し違っています。どこが違うかというとまず、構えです。襖を建て込む敷居と鴨居は黒漆塗りとなっています。そして鴨居の上に「小障子」という欄間のような襖がはめ込まれています。このような構えは「鳥居障子」といって、最も格式の高い部屋に用いられるものでした。

襖の四方、そして小障子の左右と上の三方は、軟錦縁という絹の裂地で帯状に縁取られています。屏風では一般的ですが、襖では余り見かけない表装です。屏風のような衝立が襖の起源であることを物語っています。

引き手は現代のものとは全く違って、絹の組紐になっています。このような例は京都御所などごく限られたところでしか見ることはできませんが、絵巻物にはたくさんの例があって、かつては一般的なものでした。

不動堂は古い時代の住宅を彷彿とさせる意匠を今に伝えているのです。

僧侶の住まいを思わせる住宅風の姿は、不動堂が、極楽往生を願う僧侶が最後の時を迎える特別なお堂「往生堂」だったからではないでしょうか。

高野山の文化

後山の女人禁制（第二回）

元高野山大学教授　日野西　眞定

高野山は明治三十九年（一九〇六）まで実質的に女人禁制であった。今でも女人禁制を守っている山岳霊場のひとつに、後山（岡山県英田郡）があるが、これまであまり研究されていない。そこで、後山の女人禁制について数回にわたり紹介する。

①女人堂―後山の山麓に存在し、第二次世界大戦が終わった昭和二十年頃までは、ここから中が女人禁制とされていた。この堂前の石碑には、「女人禁制　後山行者山道仙寺」と書かれてあり、後山は信仰面では「行者山」と呼ばれている。堂内には、不動明王を中心に、地蔵尊・役行者・弘法大師・聖宝理源大師が祀られている。傍らに「五十丁」の町石があり、山頂までを五十丁で区切っている。堂裏には石造の柴燈護摩壇がある。

なお、堂正面の上部に、板に女人堂神文が墨書され、「吉野なる　深山の奥のかくれ堂　本来空の住家なる」（大先達大谷四郎）が掲げられている。

後山八代龍王神

②後山八代龍王神―山上に降った雨水が河となる水源信仰の場である。ここから吉井川が発生している。雨乞いの場でもあり、不動明王が持っている劔をシンボル化した青銅製の御神体が祀ってある。場所は、四十四丁目近くで、五十丁目にある役行者を祀る母公堂から六丁ほど登った場にある。住職林晃月師の話によると、ここに虎比丘尼の伝承があるが、これが確かであれば、ここが行者山で最初に生まれた女人禁制の場であった可能性が考えられる。

③賽の河原―十三丁目にある。山頂に近くなっているが、名前からすると死者の魂を祀る場と考えられる。ここに私の自坊が但馬にある関係で関心が深い役行者が祀られてある。石造で高さ約七十センチ、幅四十センチ程ある。

その台石に、

但馬大屋講中
世話人筑　中尾太兵衛正次
大杉村栃尾弥兵次金光
勝北郡講中
関本村信心者中

とある。但馬大屋は養父市大屋町にある。

私は昭和五十三年に、名著出版発行の『山岳宗教史研究叢書』（十一巻）の「近畿霊山と修験道」に「但馬の山岳信仰」を書いたが、この講は現在は養父市大屋町・朝来町に広がって存在している。朝来町多々良木には行者岳があり、もと御所嶽といい、山の神と思われる山峯大権現を祀っていた。明治十三年（一八八〇）疫病と猪による田畑の害により、岡山の後山の行者尊を勧請して再興された。鐘掛、覗きの行場等、本格的な修験道の行場の条件を完備している但馬唯一の山であった。昭和三十九年までは女人禁制が守られ、十五丁地蔵の所にある弥勒尊の付近までしか女性は参れなかったことを紹介している。その講が建立した役行者像を拝むことができたことは、本当に嬉しかった。

但馬大屋講中が建立した役行者像

④道中の町石又は各尊―女人堂から山頂の奥の院まで、町石又は石造聖観音像（高さ一メートル前後）が祀られている。ただし、十五丁目は地蔵尊である。この尊は石造で高さ七十センチ、幅五十センチ程で、石組みの上に祀られ、上に屋根代わりの一枚石がある。裏書きに「文化四年（一八〇七）丁卯七月吉日　石工斎藤乾村　願主舟曳氏」と刻してある。その傍らに十五丁の町石が立て

られてある。江戸時代にはこのような形式のものであったが、現在では前記聖観音像に全体が代わりつつある。山頂まで五十丁と考えられる。

⑤女性と男性の垢離取場―町石二十九丁を過ぎた所に、女性の垢離取場があり、それを過ぎると二、三十メートルほど上に男子垢離取場がある。両者とも簡単な建物（高さ二メートル余。幅一メートル五十センチ位。奥行き約三メートル）があり、河に臨んでおり、そこが水行の場となっている。

男子垢離取場には、水行場神文「吉野なる深山の奥の石清水、この世のあかを洗い去りとる」を板に墨書きして大先達大谷四郎が奉納している。女性でここまで登ってきて修行するには、厳しい道仙寺住職の許可を受けてからでないとできないと思い、林晃月住職にお尋ねしたところ、今ではここまでは女性が自由に登ることになっているので、別に許可は与えていないとのことであった。林師からは、第二次大戦が終わった昭和二十年頃、女性が秘かに登っていたと聞いているとのことであるので、そのころに開放されたのではないかと考えられる。

女性の垢離取場

⑥母御堂―男女垢離取場からすぐ上方に、母御堂がある。表札に「美作國後山行者山母御堂」「是ヨリ女人禁制」と墨書してある。非常に新しいので、傍らに打ち付けられた改築寄進者の表を見ると、「平成十年九月六日」とある。建て直されて十四年目である。堂の傍らに高さ二メートルに足りない赤色の小鳥居があり、大峯山の母子堂と同じ形式である。この堂は女人堂と同一の信仰を持っている。女人堂がここまで引き上げられたと考えるべきである。しかし、後山では、役行者の母を祀る堂だと考えられているようである。これについては第一回に記しているので略す。

母御堂

母御堂内部

母御堂傍らの鳥居

（二）後山の行者組織

『先達補任簿』は、明治四十二年（一九〇九）から始まり、現在まで続いており、全て先達は住職が任命している。そのランクは次の六階級である。

権小先達・小先達―三条結袈裟を授与

権中先達・中先達―二条結袈裟を授与

権大先達・大先達―一条結袈裟（一等袈裟ともいう）を授与

となっており、二～三年で一段階昇進している。

その中で、女性に対しては、昭和十年九月十五日に権小先達に任命された芳賀世以さんが初めてで、「當山入峯女人堂迄」とあり、この時代には、まだ女性は女人堂までしか許可されていなかったようである。

女性に対して今までに許可されているのは、権小先達一百二十八人中十六人、小先達三十七人中八人。権中先達五十八人中七人である。これ以上の任命は、今のところ見受けられない。

礼録は、権小先達二千円、小先達五千円、権中先達七千円、中先達八千円、大先達一万円となっている。

以上であるが、この行者組織は今回はじめて明らかとなったことである。

現在では、女人禁制の山は、大峯山とこの後山とであるが、この山の方に整然としてこのタブーが守られている。これは今としては古い文化財として、保護されるべき存在となっていることを強く感じる。

合掌

Essay

（最終回）

冬の高野山

高野山大学准教授　井上　ウィマラ

冬の高野山はとにかく寒いのですが、雪と氷に覆われた風景の中に美しい輝きを見つける瞬間の楽しさがあります。一面に積もった雪の上に横になって青空を眺めたり、きれいに並んだ雪氷が太陽の光を虹色にきらめかすのを見つめたりしていると、一瞬この世のことを忘れてしまうような恍惚感に浸ってしまいます。だから、いくら寒くても、雪が降り積もった快晴の朝は、思わず女人道を歩きに出てしまうのです。

まだ誰も歩いていない雪道に、自分の足跡を刻んでゆくのはなんとなく気持ちのいいものです。ふりかえって、自分のつけた一筋の足跡を眺めてみると不思議と気持ちが引き締まります。ウサギや鹿など動物の足跡が入り混じることもあります。

こんなに寒くて白一面の世界の中で、見えないけれども、いろいろな生きものが呼吸して生きている。雪上に刻まれた動物たちの足跡や糞や尿の痕を見るたびに、ワクワクするような、暖かくなるようなつながりの感覚を感じることもあります。

仏典には「一道」という表現があります。解脱への道は一筋の道のりであり、それぞれが一人で歩むべき道であり、いろいろな入り口があっても解脱に至る過程でものごとの無常・苦・無我をありのままに洞察する智慧に収束してゆく道であるという意味です。ブッダが如実知見と表現した智慧を、密教では如実知自心と言います。自らの心の中に世界のすべてが含まれているということです。自分を見つめることが世界のすべてを見つめることにつながり、世界を見ることが自らを知ることにつながるようなあり方だと思います。

奥之院の水掛地蔵や手洗い場にできる氷も芸術的です。定まった形のない水が硬く凍って、いつもとは違う空間感覚を演出してくれます。御廟に詣でた後で転軸山に足を伸ばし、そこから女人道をたどって森林セラピーでも利用される湿原のあたりを散策することもあります。お地蔵さんが並んだように見える呼吸根たちも今は雪の下です。

ピーンと張り詰めたような静けさの中だからこそ気がつくことのできるいのちの鼓動があります。高野山の冬は、私にそんな時間と空間を提供してくれます。もちろん雪かきも大切な修行のひとつです。四季折々の自然の中でいろいろな発見の喜びを与えてくれる高野山。それは、今から千二百年前にお大師さんがこの地を修禅の地として選んでくださったからこそ出会えたものであり、高野山大学にスピリチュアルケア学科が開かれるという機縁で呼んでいただいたからこそ今があるのだと思うと、縁の不思議に思わず手を合わせてしまう自分がいます。

一年間四回にわたる連載の機会をくださったことに感謝して筆をおきたいと思います。

第六回もみじ祭を開催しました

（場所：当館「迎賓館」）

長谷川智弘作品展 結びの世界「みやび」

（平成23年9月27日～10月3日）

以前は大師教会ギャラリーで行われていましたが、今回は初めて、迎賓館を使って開催しました。「結び」は古来、身近な装飾で、美しく複雑な結びが生み出されました。様々な色の紐で多様に結ばれた作品の数々はどれも美しく、迎賓館内はまさに「みやび」な世界になりました。

ご縁が結ばれ、平成二十四年四月二十九日(日)～五月五日(土)の期間、迎賓館で第二回目の作品展を開催することとなりましたので、次回もぜひご覧ください。

秋の茶会と書道展

（平成23年11月12日・13日）

高野山大学の文化部が合同で、迎賓館を使って、茶会と書道展を行いました。霊宝館にご入館のお客様に茶道部がお抹茶のお接待をし、書道部の作品展を合わせてご覧いただきました。また、華道部がいけばなで会場を彩りました。

茶道部では、十二日には当初用意していたお茶菓子が、あっという間になくなる盛況ぶりで、急遽追加してお接待をいたしました。十三日には立礼(りゅうれい)だけでなく本席も設けられ、茶道に興味をもたれるお客様にもご満足していただきました。

書道部は、夏休みの合宿で仕上げた作品を展示され、弘法大師や仏教にゆかりの言葉などを書いた作品の説明をしたり、中国の書を臨書した作品で、書の魅力や鑑賞の仕方を解説したり、身近に書に親しんでいただくことができました。

華道部は部員が少ないながら、格(かく)花(ばな)や真華(しんか)など華道高野山のいけばなに触れてもらえる作品でおもてなしをしていただきました。

当日ご来館のお客様には大変好評でした。高野山大学文化部の皆様、ありがとうございました。今後も、ぜひお願いいたします。

霊宝館館長講演会

（平成23年11月6日）

長年、弘法大師の研究をしている当館の静 慈圓館長が「弘法大師と密教儀礼」と題して講演いたしました。弘法大師がどのように密教を理解していたかということを、その事績や著書から、年齢とともにたどっていくことで、弘法大師の一生と密教を分かりやすく解説し、霊宝館で展示してある曼荼羅や図像が密教儀礼にとってどのように重要かということをお話ししました。

その後引き続き、執金剛神像から銘文が発見されたことについて（二頁参照）、当館学芸員が説明会を行いました。

参加者は真剣に、時にはなごやかに聴講され、秋期企画展をより深く鑑賞されました。

新収蔵品の紹介

馬と仏と人の縁

馬頭観音立像（ばとうかんのんりゅうぞう）
厨子入り毘沙門天立像（ずしいびしゃもんてんりゅうぞう）

馬頭観音立像　木造彩色　像高 38.7 ㎝　江戸時代

霊宝館に新しく仏像が寄進、収蔵されましたのでご紹介します。像高三十八・七㎝の馬頭観音像と小さな厨子に納められた毘沙門天像です。両像ともに、京都市伏見区の小野留嘉氏が所蔵しておられました。小野氏は戦前より競馬の騎手をされており、騎手を引退された後は、調教師として八十七歳まで現役で活躍された方です。競馬ファンの方ならご存じの方もおられるかも知れません。

小野氏は、特に馬頭観音像を大事にしておられたようです。この像を所蔵されるに至った経緯を、ご息女の安川トミ子氏よりお聞きしました。

ある日、馬の調教師をされていた小野氏の夢に、馬頭観音が現れたといいます。小野氏は馬頭観音を探し求められたところ、氏の自宅すぐ近くにある與杼（よど）神社に馬頭観音像があることが分かり、像を譲り受けられたということです。それからは、小野氏によって丁重に祀られ、氏の後はご息女（安川氏のご令姉）によって日々礼拝されてきました。馬が繋いだ不思議なご縁です。厨子入り毘沙門天像の伝来は、残念ながら分か

厨子入り毘沙門天立像　木造素地金泥　像高6.9㎝　江戸時代

光背裏銘文

らないようです。

では、馬頭観音像がなぜ霊宝館に寄進されるに至ったのかと言いますと、像の光背に銘文があって、高野山の僧侶が造立に関わった旨が記されています。このご縁から、安川氏から当館にお話をいただき、寄進という運びとなりました。光背に記された銘文は、次のとおりです。

馬頭観音立像／延享五年戊辰四月上旬日命仏工龍慶新模刻和州／法隆寺鳥仏師所造尊像使□□□□□之為本所尊／夾侍祈大法師知等頓証菩提者弟子知等字覚本／去元年甲子四月六日早逝若礼此尊者請必回向云／高野山南谷成蓮院　□□□□沙門□□謹職

（※□は判読不能）

おおよその意味は、次のようなものです。

延享五年（一七四八）四月上旬、仏工龍慶に法隆寺鳥仏師（鞍作鳥）が造った尊像を新しく模刻させ、□□の本所尊（本尊）脇侍とした。そして、延享元年（一七四三）に早世した知等覚本という僧侶の菩提を祈るために、この像を礼拝することを願う。

このことから、本像は延享五年に造られたことが分かります。鳥仏師（鞍作鳥）の像を模刻（模造）したとありますが、鳥仏師の時代に馬頭観音は日本に伝わっていませんので、このまま信じるわけにはいきません。鳥仏師作の伝えを持った仏像があって、それを模刻したというのでしょう。そして、早世した知等覚本という僧侶の菩提を祈るためにこの像は造られたというのです。本像を造らせたのが高野山の僧侶であることは間違いありませんが、残念ながら末尾の名前は読めなくなっており、この文章だけでは誰がこれを書いたのか、像が元々高野山に在ったのかどうかもはっきりしません。

大きな像ではありませんが、造りは非常に丁寧で優れた出来栄えです。龍慶が優れた技量を持っていたのでしょう。保存状態もとても良く、小野氏が大事にして来られた様子を窺い知ることが出来ます。

二五〇年の時を経て、小野氏と馬頭観音像を馬のご縁が繋ぎ、安川氏と霊宝館のご縁を馬頭観音像に繋いでいただき、御像は高野山に来られました。この先また何百年と御像は伝えられていきますが、同時に今回のご縁も大事にお伝えしていきたいと思います。

（T）

霊宝館の庭園

ヌルデ・白膠木・フシノキ・五倍子の木

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

ヌルデはウルシ科・ウルシ属の落葉小高木、人工林や自然林の伐採跡地、地崩れ地、道路・建物のための造成地の周辺などに、先ず生えて二次林をつくる先駆（パイオニア）樹種の一つです。

四季のうち、この木が目立つのは枝先に円錐花序・穂状に白い小さな五弁花を多数つける夏の終わり頃と高野山でも他の樹種に先んじて紅葉する時期です。

ウルシ属のRhusという学名はケルト語のrhudd（赤色）によるといい、同属の樹木（藤本も含む）は紅葉が美しくて、特に、ヌルデの鮮やかな紅葉を、ぬるでもみじというほどです。

大木、巨木になることもない小高木ですが、古くから知られ、名もつけられていた木のようです。

日本書紀・巻第二十一・崇峻天皇には、蘇我氏と皇族の連合軍が、仏教を排斥し寺塔を壊し、仏像を焼くなどという物部氏の暴挙に対抗して戦った時、厩戸皇子（聖徳太子）が戦況不利、願をかけないと勝利は叶わないと感じとり、白膠木を切り取り、急いで、四天王の像を作り…という件があるのは周知のことです。その白膠木がヌルデの古名の一つ。幹の樹皮を傷つけて採った白い樹液を器物に塗ったといい、ヌルデという和名の命名の理由ともなっています。この故事によるものか、勝木、勝軍木の別称も。万葉集では可頭乃木の名で詠まれ、後の人が、かづの木と訳しています。

果実に塩辛い白粉を生じるので塩膚子の別称、しおのみという方言名もあります。

大きな羽状複葉という葉にヌルデシロアブラムシの幼虫が寄生して虫えいという虫瘤ができることがありこれを五倍子（ふし）といい、五倍子チンキ、インク、黒色藍色染料の原料となり、往時は女性が歯を黒く染める「御歯黒」にも用いたそうです。この木の別名・フシノキは、この五倍子のできる木に由来します。この虫瘤の形が風鐸銅鐸など鐸に似ているということが、ヌルデという名のもとになっているのではないか、という説もあります。

幹材は同属のハゼノキ、ヤマハゼ、ヤマウルシなどとともに護摩の乳木などに用いられるので護摩木の名もあります。ヌルデやヤマウルシにはハゼ、はぜのきという方言名も。

地方によっては縁起のよい木として、正月用の餅搗きの時の竈の火の薪や祝い箸、小正月（一月十五日・旧暦では今年は三月六日）の予祝行事、果樹の豊作を願っての「成る木責め」の果樹の幹を打ち叩く棒、農作物、特に稲作の豊穣を祈っての「削り花」や「餅花」の添え木、魔除けの木刀などをつくる木でもあったようです。

羽状複葉と円錐花序の花

ぬるでもみじ

塩膚子・しおのみ